ロード・テイラー

ロード・テイラー宅の中は、存外華美ではなかった。しかし趣味の良い調度品、一つ一つの飾りが邸宅に彩を与えている。全体の雰囲気が統一され、一つのテーマ性すら帯びる。率直にセンスが良い、成金趣味の一級市民にはないセンスが感じられるのだ。

「父上は余り物にお金をかけない主義で、よく貧乏性だとわれるけど、僕はこの家が結構好きなんだ」

カールの言葉に内心でウィリアムも頷いていた。華美ではない、しかし優雅である。

「私も好ましいと思います」

「だからあああ、敬語禁止だって！むずむずしちゃうよ」

（無理に決まってんだろダァホが）

ウィリアムをぶーたれた目で見つめるカールに、内心苛立つウィリアム。

（庭、壁はそこまで高くない。いざとなれば逃げ出すことは可能）

そこまで広くはないが、やはりセンスの良い庭。中央には噴水、周囲を池が囲う。不断なら居心地のよさにため息の一つでも出たかもしれないが、今のウィリアムにそんな余裕はない。

（間取り自体特殊な構造は見出せない。みなくてもある程度の構造、通路は分かる）

もし、カールが手のひらを返したならば、もし、カールの父がウィリアムを亡き者にしようとしたならば、逃げ出す準備は必須。

可能性は低いかもしれない。しかしゼロではない。

「こっちだよ。もう食事の準備はできてるはずだから」

カールが手招く。扉の前に居並ぶ幾人かの使用人。質素なメイド服を纏い、立ち居振る舞いはしっかりとした教養を感じさせる。

「……わかりました」

ウィリアムは表情を変えない。此処まできたら覚悟は出来ている。想像すらしていなかった貴族との対面、あまりに早すぎる機会、そう、これは機会でもある。

（俺は……負けない）

覚悟、完了。

「どうぞお入りください。カール様、リウィウス様」

メイド長らしき老齢の婦人が扉を開く。その奥に鎮座するものこそ――

「ようこそ、テイラー家へ。歓迎するよウィリアム君」

ロード・テイラー。ウィリアムが初めて目にした生粋の貴族。

「お招きに預かり大変光栄です。ロード・テイラー」

ウィリアムは深々と頭を下げる。作法の一つや２つ身につけている。これもまた書物でえた知識。実践するのは初めて、貴族に合ったのが初めてなので当然ではあるが――

「ほんとに白亜のような白髪なのだな。白髪交じりの男が来るものだと思ってたぞカール」

ウィリアムが声のした方に視線を移す。ウィーブかかった金髪を一纏めにくくっている男。年カールやウィリアムより少々上に見受けられる。

「失礼だよあにうえ」

憤慨するカールが答えを述べた。

「失敬客人。私の名はアインハルト・フォン・テイラー。職業は学者デカールの兄だ」

うやうやしくウィリアムに頭を下げるアインハルトを見てウィリアムは反射的に頭を下げた。その様子がつぼに入ったのか、奥に座るロード・テイラーがくすりと笑った。

「そして私の向かいに座るのが、我らが最愛の妹、ルトガルドだ」

アインハルトの向かいに座る少女が、恥ずかしげに会釈する。ウィリアムが視線を合わせると、ルトガルドはさっと視線をそらした。

（……平民年戦をあわせるのはいやだってか？）

表情一つ変えぬウィリアム。内心は穏やかではない。奥に座ることこも、カールの兄であるアインハルトも、ルトガルドでさえ、自身を見下している風に感じてしまう。否、そう思ってしまう自分がいるのだ。

「あはは、ルトガルドは見知りが激しくてね。まったくもう、ちゃんと挨拶するんだ！」

ぷくりと頬をふくらませるカール。それを見てルトガルドは申し訳なさそうな表情になる。

「る、ルトガルドです。お初にお目にかかります、ウィリアム様」

「ルシタニアから来ました。ウィラム・リウィウスです。こちらこそお目にかかれて光栄です、ルトガルド様」

つらつらと嘘の経歴を語るウィリアム。いや、『自身』は間違いなくルシタニアの居wリアムなのだから間違いなどない。

「最後になるかな。私がロード・テイラー・ローラン・フォン・テイラーだ。今後ともよろしく頼むよ、カールの恩人にして友人のウィリアム君」

貴族が頭を下げたことに少々の困惑を浮かべるウィリアム。

「さあ座りたまえ。ささやかながら宴としよう」

「……失礼します」

席の配置は、もっとも奥が家長たるローラン、左にアインハルト、カール。右にはルトガルドと――

「……その、よろしいでしょうか？」

「あ、はい。どうぞ」

消え入りそうな声でルトガルドは答える。ウィリアムが着席し、

「料理を持て、夕餉とする」

ローランの掛け声とともに夕食が始まった。